

# 筆山

第27号 / 1999年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲 (41回)

〒106-0032 東京都港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201  
E-mail : tsuruwa@mxq.mesh.ne.jp 関東支部ホームページ : www.2u.biglobe.ne.jp/~tsuruwa/kantosibu.htm



五台山から見た高知の町 (関東支部HPより)

思い出すまめに

安藝 勉 (8回生)

一 筆山について  
私の生まれ育った高知市には筆山という可愛らしい山がある。軸太の筆が静かに横たえられた様子でもある。小さい山ではあるが市内では殊更有名であり、在学中は時々流れる大汗をふきふきクラス毎に懸命に登られたものである。

筆山の麓鏡川の畔とは我が土佐中学の所在する所であり、その筆山並に母校は共に鏡川の南側に位置している。

二 故修兄について

おがましいことであるが、修兄は実私の長兄で土佐中学の第1回生であり、同期最後の生き残りであったが、本年8月1日老衰にて九十一歳の寿命に終りをづけ、第1回生は遂に一人も生存しなくなつたと聞く。残念なことである。私の属する第8回生さえも既に十名足らずの生存者を数えるのみ、淋しい限りであるが、人間寿命には勝てないものであつてみれば之亦致し方もあるまい。

三 初代校長三根圓次郎先生について

初代の三根校長は昭和10年3月18日急逝されたが、目の病気のため既に全く見えなくなつたものの、温存のもと眼光更に鋭く、私達は帰郷時母校に必ず校長をたずねたものであるが、声で識別されたものが、鋭い御注意にはいつもびくびくしていたものである。

御長男は今も亡き超有名歌手ディック・ミネさん(三根徳一氏)であつたのは改めて言

う迄もないであろう。

四 三根校長の校葬による告別式について

私が東京の大学一年を終り、楽しみにした春休みに帰高した時、なんとということが、思いもかけない同先生の御逝去にぶつかり、校葬としての告別式に出席、卒業生総代として弔辞を読まれたものである。どういふものか私より年次が上の卒業生が誰一人として帰高しておらず全くやむを得ないことでもあった。国語担当の樋口一治先生の御指示にて徹夜で乱れ文字も顧みず墨書した弔辞を翌日の告別式で読み上げたのであるが、冒頭から、とめどなき涙にあふれ、とぎれとぎれの読み方には我ながらあきれはてたもので、列席の方々には誠にお聞きづらかったことであろう。

その後同窓会から出版された(昭和18年6月30日付)三根先生追悼誌には弔辞としては兄の修名となっているのは編集者の方が、8回生の私でなく、それよりも1回生の兄の名前がより妥当との配慮であったのではなからうかと思われるのであるが、事実は今述べたとおりである。このこ

とは何年か前の筆山誌上にて申し述べたことがあるので御承知の方もあるかと思われる。

五 先祖の歴史上実在証明について

私の三年生の頃だったか、樋口先生から教わっていた平家物語の中の源平壇の浦の合戦の一部分に於て、平能登守教経という平家随一の猛将(百人力といわれた)に追いつめられた源義経が海上で船を身軽く次々と飛び移って逃れて行った八艘飛びの場面で、その教経をささざるべく左右から彼の船にとび移り、彼に両わきからとびかかって行った二人の武者(義経の家来)が居た。それが安藝の太郎(五十人力)、次郎(二十人力)という兄弟であったが、力まされる教経はこれを両脇に抱えこみ、三人組合つたまま海中に落ち、共に戦死したと記されていたが、その時先生から「これはお前の先祖とちがうのか」と尋ねられて知らなかった私は全くのところどう答えてよいか分からず驚いたが、実は当時我家の押入の中に虫にあちこち喰われて穴の沢山あいた和紙製の系図が入っていたのをおぼろげに

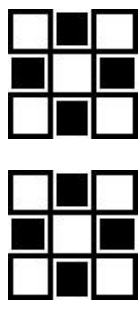
知っていたので、下校してよく調べたところ、問題の場面で確かに太郎次郎の両名の名前の左下に、はつきり「壇の浦において能登守教経と共に入水す」と註記されていたのが分った。翌朝職員室にて先生に深くお詫びをした記憶がある。そしてこの二人の先祖には何がしかほのかな親しみをおぼえたものである。この時先生のその御質問がなかったなら、詳しいことは一切分らずじまいとなっていたことであろう。世の中とは全く不思議なものである。

六 おわりに

母校には兄弟生徒が割合と多く学んでいたものであるが、余り優秀でもなかった私にとつて、特に優秀な成績を残していた兄が1回生として居たため、古い先生方の中に、兄を教えたり、知って居たりしていた先生がまだ残って居られたことが私の立場からは大変恥かしかつたことが思い出される。その先生方から折にふれ兄の話が出ると、それが励ましの意味であったと感じたにせよ、随分と心苦しかつたものである。何くそと自らを極力鞭打ち何とか兄と同じ上

級学校の過程文でもくぐり抜けられたことが今にして思えば本当に有難く感謝の気持ちに強く通ずるものがある。兄弟とは正にそつういふものであろうか。

そこはかとなく、とりとめのないことを思い出すままに茲に綴つたことを何卒御容赦願いたいものである。私の入学した頃南面であつた正面玄関も今は北面となつている母校・・・、その更なる発展を心から祈つてやまないしだいである。



### 関東支部活動報告

事務局長 鶴和千秋(41回生)

前号で詳しくご報告致しました6月の支部総会、多数のご参加のおかげで、他支部本部からの参加者に大きなインパクトを与えたようでした。「うちの支部でも学生の出席をもっと増やさんといかん」等、続々と反響が寄せられました。

今年後半の関東支部の動き

を、以下にご報告致します。  
学年幹事会  
昨年の学年幹事会で提案された「支部規則15条の改正案」が、今年の支部総会で承認されました。

支部総会の開催時期が5月下旬もしくは6月上旬に移行したことに伴い、関東支部の会計年度および学年幹事会の開催時期を変更しようというものです。  
第15条 この会の会計年度は、毎年1月1日から12月31日までとする。

この結果、毎年9月に開催されていた学年幹事会が、毎年2月に開催されることになりました。次の学年幹事会は平成12年2月26日(土)の開催となります。学年幹事の皆様には1月中旬にご案内を差し上げます。

また来年の関東支部総会は、平成12年5月27日(土)に今年と同じ渋谷区代々木の「国立オリンピック記念青少年総合センター」で行います。来年は末尾「0」の回生(30回生・70回生)の方々に担当していただきます。ご期待ください。

母校創立80周年  
本年8月7日(土)高知市

内新阪急ホテルで開かれた同窓会本部総会に宮地支部長、溝淵幹事長以下7名の役員が出席しました。会議では母校創立80周年の記念事業について検討されましたが、その中で関東支部では一つの提案をして参りました。

昨夏発行された本部会報『向陽』の創刊号に母校の坂本隆先生(47回生)の「戦地からの軍事郵便」という一文が掲載されていました。

昭和12年から戦地に招集される17年までの5年間、母校で教鞭を執られた中澤薫先生(4回生)の、母校への愛情と、教え子達との心の交流の記録を発掘し、その軌跡を忠実にたどる作業の中から、土佐高教育の原点をもう一度見つめ直そうという、坂本先生の母校への熱い思いに溢れた力作でした。

今年に入り、これを一冊の本に纏め上げたいという坂本先生のご意向を知り、関東支部役員一同は、この本の出版こそ80周年記念事業に相応しいと考えて一致し、本部各支部の役員の皆様の賛同を得ることが出来ました。来年11月の記念式典までには上梓される予定です。

### 筆山会

関東支部の比較的年配の同窓生の集りである「筆山会」の会長が交代になりました。関東支部の前の支部長で永く筆山会の会長を勤められてきた北岡龍海さん(5回生)の「若手」に道を譲りたいとお考えで、16回生の吉澤信一さんに引継がれました。新体制となった筆山会の重厚かつ若々しい活動にご期待ください。

### 同窓会館建設基金

溝淵幹事長の提案で、5年前からスタートした同窓会館建設基金は、平成11年10月末現在で、金一、九四六、六一六円となっております。この1年間には、6月の支部総会に出席された方々、筆山会の新年会やゴルフコンペに参加された皆様、一木会に集まった呑ん兵衛諸君などから、合計金一八八、七八一円のご寄付をいただきました。ありがとうございます。

なお基金の振込口座が、四国銀行東京支店(普)口座番号〇二二三八二一、土佐中・高同窓会館建設基金」に変更になりました。今後とも同窓の皆様のご協力をお願い致します。

## 名簿事務局より

この半年間で左記の方の住所が不明になりました。消息をお知りの方は関東支部事務局にご一報ください。

74	74	74	73	72	72	72	70	70	70	68	67	65	64	63	62	58	57	56	49	47	42	42	41	40	39	38	36	36	31	
N	K	O	H	T	N	H	H	T	S	K	T	T	S	N	K	T	T	H	N	O	K	K	O	N	K	S	O	O	H	K
山	永	城	宮	石	戸	青	岡	坂	洪	恒	池	久	長	野	日	矢	吉	田	安	傍	児	山	島	北	前	武	河	永	溝	
川	野	下	川	川	田	山	本	本	谷	石	本	松	崎	村	浦	間	村	部	原	土	島	内	本	村	田	野	吉	弘	雄	
泰	博	愛	伸	晋	泰	信	龍	宏	由	知	昌	宏	泰	昭	正	博	之	卓	淳	英	貴	芳	修	宗	南	拓	弘	雄	介	
幸	也	愛	晃	介	子	政	龍	宏	佳	子	弘	昭	泰	朗	道	中	久	泰	司	敏	美	郎	三	範	海	二	一	一	介	

連絡先：関東支部事務局  
TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail : tsuruwa@mxq.mesh.ne.jp

## 母校だより

学校長 森田幸雄  
土佐独特の季節的表現とされる卯夏も終り、当地もすっかり秋の気配となりました。会員の皆様にはますますご健勝の御事とお慶び申し上げます。

さて2学期当初の伝統的行事である第52回中・高合同の大運動会は、台風18号の為3日間順延の後、去る9月26日生徒実行委員会の手により盛大に開催されました。尤も今回の延期はグラウンドコンディションの調整によるもので、昨年の大水害に伴う大幅延伸とは異なり混乱は全くありませんでした。なお今回も昨年に引き続き正副実行委員長は女子の独占となり、本校八チキンパワーの健在振りを強く印象づけました。このように貴支部愛称八チキン会諸姉の後継者達は元気に育っていますので何卒ご安心の程お願いいたします。

次に従来の中3生の修学旅行に代わる中2生集団宿泊研修が10月28日から2泊3日の日程で実施されます。いわゆる移動観光型から定地訓練

型への転換です。礼節とマナー尊重の輝かしい伝統をしつかりと体得してくれるよう、又中学生らしい元気の研修となるよう期待しています。それにしても1年若返りの中2生は本当に可憐な感じであり、どうかすくすくと素直に成長してほしいと願わずにはいられません。生徒のしおりに「ハジケまくるぞ」という愉快な傲もあり成果を楽しみにしております。

次に進学校として最大の課題である大学入試への取組みですが、これから期末にかけて高3生を中心に特訓や模試、プレテスト、志望校検討会等々、真剣な最終取組みが続きます。本年度の現役合格率は七四・四%と急上昇し、統計上過去最高の記録となりました。嬉しい限りですが、今後は加えて東大京大等最難関校を含むワンランク・アップ達成を目指し全力で取組んでまいりますので何卒ご声援の程お願い申し上げます。因に今年度の入試センター試験出願者は二六一名で前年を上回る約91%の出願率となりました。

さてご承知のとおり来年(平成12年)は記念すべき学校創立80周年に当たります。現

在校内では記念行事実行準備会を立ち上げ、検討態勢に入ったところです。組織の概略は正副実行委員長の下に記念行事関係、記念事業関係の二つの柱を設置、それぞれに責任者(担当者)を定め、式典や祝賀行事、記念誌等の実行細目を具体的に詰めてまいることになろうと存じます。勿論この事業は同窓先輩の皆様様の強力なご協力無くしては成り立たないものばかりであります。今後いろいろと無理なお願いを申し上げますが、是非あろつかと存じますが、是非お聞き届け頂きご支援を賜わりますようお願い申し上げます。向寒の砌、関東支部のますますのご発展と会員各位のご健勝を祈念申し上げます。学事報告とさせていただきます。

### 本部だより

幹事長 岡内紀雄(34回生)

1999年8月7日(土)

高知新阪急ホテルにおいて、新卒74回生を含む多数の同窓の出席を得て、総会・記念講演ならびに懇親会が盛大に開催されました。

総会では、本部ならびに関

東・関西・東海・広島・香川各支部の活動報告や、収支決算・予算が承認されたほか、会則を改正(役員の数を変更)した後、役員の数を変更いたしました。新役員は次の各氏です。(敬称略)

- 会長 岡村 甫 (32)
- 副会長 浅井 伴泰 (30)
- 大久保浩一 (32)
- 森木 房恵 (39)
- 川崎 康正 (42)
- 岡内 紀雄 (34)
- 副幹事長 永野 和宏 (34)
- 横田 整一 (40)
- 岡田 容典 (47)
- 西山 彰一 (48)
- 千頭 裕 (58)
- 森木 将雄 (32)
- 田中 章夫 (40)

記念講演は、20回生、元広島高検検事長で弁護士・相模女子大学理事長の竹村照雄氏による「土佐人への回帰」というテーマで、このテーマは「土佐に生れて、土佐の大地(父母の眠るところ)に帰る」ということから、「コンプレックスを持つことは決して悪いことではない。それをバネにして向上を図ることが大切である。」など、氏の生い立ちから今に至る、人格の形成に影響を与えた幾つかのエレメ

ントについて、大変興味深く、一本筋のお話をしていただきました。



懇親会は、森田校長をはじめ多数の懐かしい先生方を交えて、ソフトボール部球友会の元氣あふれる司会進行のもと、新旧同胞盃を交しつつ、思い出話に花を咲かせ、応援歌を合唱、岡村会長ならびに



母校にエールをおくりお聞きとなりました。なお、2000年の総会は8月5日に開催いたします。関東支部のみなさま多数のご参加をお待ちしています。

### 東海支部だより

事務局長 南毅一(37回生)

燃える前に終わった。そんな感じの今年の秋。ゴルフで言つ「待ちチョロ」になつちやつて。

しかし日本シリーズが始まる迄の1ヶ月の間は楽しかった。なんたって巨人倒しての世界一ですもの、これで日本一にでもなつたら、それこの東海の地が日本の首都になつたよな...。まっことさわがしい風がビュービューでした。そう言えば、今年の春、わが支部の総会にご出席の皆様と野球談議に花を咲かせましたネ。そこいらの熱気がわがドラゴンズを押し上げたのではなからうか。特に甲子園の元祖スター永野関西支部長には感謝しております。貴方様が「采女下るよ」になつてスズメンとドラゴンズが上昇ムードになりました。来

年の支部総会にもぜひともお越し下さい。

さて、この東海の地をさらに活性化しようと名古屋駅前のツインタワー、愛知万博、中部国際空港の建設等、大型プロジェクトが進行中です。こんななかでの地元ドラゴンズの優勝ですから人の気持ちの盛り上がり加速され、近々名古屋経済は復活するのではないのでしょうか。そこいらの難かしい話は12月5日(日)に開催する支部忘年会で酒を酌み交わしながら土佐高OBの秀才に聞くとします。また来年来年。来年があるさ。

### 関西支部だより

幹事 中山眞智子(46回生)

関東支部の皆様、こんにちは。関西支部の今年一年を振り返り返ってみます。

1月に、2年振りになんぷ19号を発行しました。

2月19日(金)に、関西支部総会を新阪急ホテルにて開催。特別ゲストの中澤節子先生に、退任にあつたのお話を頂きました。6年ぶりの会計報告ができました。

3月26日、今年第1回目の幹事会・総会反省会を開き、この会で、新幹事増強を努力目標の第一としました。その結果、現在40名の幹事が関西支部を支えてくれています。

5月14日の幹事会では、会費制にて、土佐料理・いごっそう寿司で開催。9月からは、ほぼ1回のペースで幹事会を開いています。10月は、「手弁当」との支部長の提言に基づき、会費制にて、寿司弁当と発泡酒で熱のこもった幹事会を展開しました。幹事が盛り上がりれば総会は盛り上がる、をモットーに、只今来年の総会に向けて秘策を練っているところです。

### 広島支部だより

来年の関西支部総会は平成12年1月15日(土)に開催します。

会計監査 天田充(26回生) 西暦2000年を目前にして、これがいつごろの世紀末というか自然も社会も又経済界も大変な事件が続いております。

大きな被害がでました。特に、世界遺産に登録されている安芸の宮島で有名な厳島神社の一部が倒壊して、観光に生きる町が大変な影響を受けております。テレビ、新聞等でも連日金融界を取り巻く大合併劇や日産をはじめとするグローバル提携が報じられ、リストラの嵐が吹き荒れています。明治維新や日本の敗戦による社会変動は、すべて外圧による旧体制から新しい体制への移行でしたが、今、起こっている事態もまた、グローバルスタンダードという名の外圧による経済分野のスクラップ&ビルドの大改革に思えます。新しい秩序形成のための産みの苦しみと受け止め、大いなる未来に希望をもってお互いに頑張りましょう。いよいよあと、2ヶ月で殺戮の1900年代も終わり、平和を祈念する2000年にはなります。(21世紀は2000年からですが、...)この瞬間を生きるであらう一人として感慨一人のものがあります。

### 香川支部だより

支部長 土田哲也(32回生) 関東支部の皆様には御清栄のこととお慶び申し上げます。

日時平成12年1月22日(土) 14時30分~19時30分 場所 広島県民文化センター 講演者 折衝中 学生懇親会無料(招待扱い) 11月になると準備に取り掛かり、案内状は12月中旬発送の予定です。

本年度の香川支部総会は、6月26日(土)18時から「なか座」というところで開催しました。支部創設以来お世話になった「土佐つ子」が閉店されましたので、変更した次第です。当日は雨天でしたが、来賓として、母校から森本亮教頭先生、本部から岡村甫会長、岡内紀雄幹事長、広島支部から小島一洋事務局長、関西支部から竹下和夫幹事長の皆様に出席頂きました。支部会員は、31回から70回までの27名が出席しました。

今年是全国的に長雨、台風で、早明浦ダムは満水状態の日数が記録的な長さとなり、お陰で高松は水の心配がなく夏を過ぎました。しかし、暑さは格別で、残暑という言葉がつい最近まで使われるほどでした。

# ソムリエのバックボーンは高知の「おきやく」

田崎真也ワインサロン副支配人 阿部川知佐(56回生) (旧姓:濱田)

現在、私は、世界一のソムリエ、田崎真也氏が主催する「田崎真也ワインサロン」というワインスクールで、講師として、また経営全般に携わる副支配人として勤務しています。

先日、久しぶりに帰高し、高知流の宴会に出ましたが、これこそ全世界に通用する「もてなし方」だなあと、自分が育った環境を誇らしく思いました。ホストがビールとコップあるいは徳利とおちょこを持って、「ご返盃を繰り返しながらゲストを一人一人回ってご挨拶させて頂く。つい最近、お茶を習っている友人に聞いたところ、亭主(ホスト)が高知流飲み方と同じように盃を持ち招待客(ゲスト)を回ってご挨拶することを「千鳥の盃」と言うそうで、高知流飲み方は「茶の湯」の世界にも通じるのです。

私が高知で、「おきやく」という宴会の世界にデビューしたのは多分小学生低学年くらいの頃で、実際にお酒を飲んでいたかどうかは定かではありませんが、「ご返盃」という言葉を繰り返し大人にきちんとおしゃくをし、小学生

高学年の頃にはいっばしに、盃を交わした相手の盃の中身が空になっていないと、「まだ空いちゃあせん」と首を横に振り、返盃の盃を受け取ることを拒んでいたように記憶しています。そして中学生くらいになると、つがれた盃のお酒に口だけつける真似をし、相手の目を盗んで残りのお酒はテーブルの下に置かれていた灰皿に移すという高度なテクニクを身につけていたと思います。

私の実家は、土佐高から歩いて3分程のところに天神町にある酒屋で、当時は酒屋どうしの親睦を深めるために月に一度、各酒屋持ち回りで、「おきやく」を開いていました。今はもうありませんが、当時どこの酒屋にも「コップ酒」が飲めるカウンターがあり、食事時などは家族が順番に店番をするため、小学生頃から、仕事帰りに一杯飲みに立ち寄る「コップ酒」のお客さんに一升ビンからお酒をつぎながら「表面張力つけちよくきええ」とサービスしていました。また両親の「女は自分の限度をしっちゃかんといかん」という教育方針のおかげで、何かの折に少量のお酒を飲むことは許されていたので、土佐高を卒業し、青山学院大学文学部フランス文学科へ進学した頃には、「高知の酒屋の娘はさすがに酒が強い」という印象を周りに与えていたように思います。



そんなバックボーンを持つ私がワインに出会い、ソムリエの資格を取ったのは、全日空の国際線でスチュワーデスとして勤務していた時で、その時

は、自分が飲むためではなくプロとしてきちんとした知識を持つお客様にワインをサービスしたいと思ったからでした。現在、日本ソムリエ協会が認定する資格呼称は、ソムリエ(5年以上サービス業に従事し、現在も従事している人)、ワインアドバイザー(3年以上酒販業に従事し、現在も従事している人)、ワインエキスパート(一般のワイン愛好家、私の生徒さんでもあった女優の川島なお美さんが取得したのもこの資格)の3種類です。試験は1次試験と2次試験があり、1次試験は、電話帳ほどの厚さのある教科書から出題される筆記試験。膨大なワインに関する知識を暗記しなくてはなりません。もちろんフランスワインに限らず、イタリア、ドイツ、スペイン、ポルトガル、オーストリア、ハンガリー、ギリシャ、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、日本など世界中のワイン、そしてお料理、公衆衛生に至るまでの知識です。頭を振るとこぼれ落



ちそうになるまでなんとか知識をつめ込み1次試験に合格すると、口頭質問とブラインドテストイングの2次試験が待ち受けています。私の時は、白ワイン、赤ワインとも2種類ずつの計4種類のグラスワインの外観、香り、味わいのコメントを書き、ぶどう品種、ワインの銘柄、産地、年代、価格、サービスする時のワインの温度、相性の良い料理を書き出すというものでした。そしてさらに、ソムリエだけには、「実技」という2次試験が課せられます。厳しい表情の試験官の前で、ワインのオリを取ったり香りを聞かせたりするために、本来ワインが入っているボトルから、デカントールというガラスびんにワインを移しかえる作業をします。ここでは、

今こんなことになっています

テクニクばかりではなく、サビスマンとしての素質もチェックされますので実際のお客様の前でやっているという想定のもと、清潔感のある身だしなみはもちろんのこと、はきはきした言葉づかいや、エレガントな身のこなし、好印象を与える笑顔なども重要なポイントになります。胃がしくしく痛くなるような合格率35〜50%の試験をなんとか突破し、合格通知と金色に輝くソムリエバッジを手にした時は、涙を流して大喜びしました。

現在は、その喜びを生徒さんに味わってもらいたく、資格を取るための認定試験準備講座を立ち上げ、8〜9割の合格率を誇っています。ワインを通じて人と人が出会い、一生の友達になれるように、高知の「おきやく」で培った「おもてなし」のサビスマン精神をベースにしてこれからも頑張っていきたいと思っています。

最後に、田崎真也ワインサロンでは、ワイン初心者のための講座や、田崎真也が直接指導する上級クラスまで様々な講座を催していますのでいつでもお気軽にお問い合わせ下さい

## まだ、吹いています

三菱信託銀行 エコノミスト

岩井千尋(42回生)

恥ずかしながら、まだ、ラッパを吹いています。昭和37年の秋のことですが、ブラバン(吹奏学部)へ入部して緑青サビだらけの楽器を与えられて以来、ラッパ狂いと化して35年以上経つても、いまだにあちこちでジャズのトランペットを吹いておりま

す。ピアノ、ベース、ドラムをリズム陣にして、テナー・サクソとトランペットをフロントに構えたクインテットでの演奏が基本ですが、まずテーマをやってアドリブ・ソロを各個人に回します。まあ、たまに、自分だけしか解らないのかもしれないのですが、4小節くらい気に入ったフレーズが吹けるところがあります。

「毎月、渋谷で」ここ5年ほど、毎月第2金曜日の夜、渋谷シーバード(田369・180)というジャズ喫茶で演奏会を開いています。出演者も聴衆も無料の気楽なコンサートには、ありがたいことにたくさんいる

な人々が来てくれまして、これまでジャズの虜である店主を筆頭に、ああでもない、こうでもない酒を飲みながら批評してくれます。前衛指向の個人タクシー運転手、最近プロのピアニストに転向した元麻酔医、チャリヤー・パーカー論を著したトビ職人、コルトレーン狂いの弁護士：



セクションにいて、ときどき講演などで出張もします。ところで、ジャズは一定のルールと習慣を持った音楽で、テーマとコード進行が解れば飛び入りができます。出張先にも、たいてい鞆に楽器を隠し持つて行くのですが、スイスのチューリッヒに出張したとき、ジャズ・バーで地元

の個人が来てくれまして、これまでジャズの虜である店主を筆頭に、ああでもない、こうでもない酒を飲みながら批評してくれます。前衛指向の個人タクシー運転手、最近プロのピアニストに転向した元麻酔医、チャリヤー・パーカー論を著したトビ職人、コルトレーン狂いの弁護士：

「毎月、渋谷で」ここ5年ほど、毎月第2金曜日の夜、渋谷シーバード(田369・180)というジャズ喫茶で演奏会を開いています。出演者も聴衆も無料の気楽なコンサートには、ありがたいことにたくさんいる

な人々が来てくれまして、これまでジャズの虜である店主を筆頭に、ああでもない、こうでもない酒を飲みながら批評してくれます。前衛指向の個人タクシー運転手、最近プロのピアニストに転向した元麻酔医、チャリヤー・パーカー論を著したトビ職人、コルトレーン狂いの弁護士：

セクションにいて、ときどき講演などで出張もします。ところで、ジャズは一定のルールと習慣を持った音楽で、テーマとコード進行が解れば飛び入りができます。出張先にも、たいてい鞆に楽器を隠し持つて行くのですが、スイスのチューリッヒに出張したとき、ジャズ・バーで地元

：と、実に様々な人々が集ま

ありますが、もう見事に上下

バンドに飛び入りしたことがあ

りませんが、もう見事に上下関係も利害関係もない、そのブレンさが素晴らしいので

「出張先でも」勤めは三菱信託銀行というところで、経済・金融の調査

バンドに飛び入りしたことがありますが、もう見事に上下関係も利害関係もない、そのブレンさが素晴らしいので

「出張先でも」勤めは三菱信託銀行というところで、経済・金融の調査

バンドに飛び入りしたことがありますが、もう見事に上下関係も利害関係もない、そのブレンさが素晴らしいので

バンドに飛び入りしたことがありますが、もう見事に上下関係も利害関係もない、そのブレンさが素晴らしいので

思いでの先生方 中澤 節子先生 (79才)

# 母・中澤節子

長女 後藤 淳子 (36回生)



母は大正8年11月1日、東京で3人兄弟の長女として生まれました。この拙い文が皆様のお目に留まる頃には、80歳になつてはいます。でも私が書いている現時点では、まだ79歳です(ここの所がともつるさい。クレームが付かないよう正確な期さねば)。5歳の時、あの関東大震災に遭い、親子5人命からがら東京を逃げ出して、関西に移り住みました。兵庫県立第一神戸高女・高等科・英文科を卒業後、昭和16年の秋に父と結婚。翌17年に私、18年に妹とあつと言つ間にふたりの子持ちになつてしまいました。



昭和17年 母23才 淳子0才

19年の春に父に召集令状が来

て出征、20年の終戦の日を目前にした7月17日に戦死、とふたりの結婚生活は正味2年と少し位でしょうか。猛スピードであつてはなかつたもののひとり身、25歳でした。しかもふたつのコフ迄付いて…。もともと母には英語の教師にならつたという気持ちなど皆無だつたのだそつです。時代が時代だつたものですから、女が外で働くなんて、普通の家庭の娘がする事ではなく、お茶・お華・料理…とお定りのいわゆる「嫁入り修業」なるものをしつかりやらされたとか。ただ英語が人一倍好きで、チヨツ

ト頑張つてみただけとの事です。「好きこそもの上手なれ」「芸は身を助く」というのが、実感を含めた母の口ぐせです。夫に死なれ、ふたりの子供と母親を抱えて、さてこれからどうやって生きて行くのか？ 愚案投げ首の竹の子生活を、



昭和41年 45回生と遠足で室戸へ

見るに見かねた知人が仕事の世話をしてあげようと、母の履歴書を見ていて、「おまさん！この経歴じゃと先生の資格がありあせんかね？」と言つて下さつたらしいのです。自分に資格がある事さえ知らないという有様だつたようです。そして疎開していた父親の出身地である香美郡夜須町の中学校に、無事職を得る事が出来ました。その2年半後、ある方のご紹介で面接を受けた土佐高に、幸運にも採用されたのでした。以来、時間講師としての最後の一年を含めての48年間、ずっとお世話になつたという次第です。夜須中学の分を加えますと50年と半年。教師生活半世紀というわけです。(ただ今、明徳義塾校にて記録更新中)

数多くの出会いや別れがあつたであろう48年間の母の土佐高生活のうち、私がすぐそばで、教師としての母を見ていたのは16年間だけです。ちょうど3分の1というわけで、



昭和47年 土佐高校庭で

私の思い出の中にある「母と土佐高」という事では、やはり32回生の方々を置いては語れないと思います。と言つより、その他の学年の方々と交流を、私がいまだ知らないと言つた方が正しいのかも知れません。昭和26年、母が土佐高に就職出来たその年、時を同じくして入学されたのが32回生。つまり両者は「同期の桜」というわけなのです。その頃、私達女ばかりの4人家族は、学校近くの小さな古い借家にひっそりと暮らしていました。飼つていた犬で「チロ」という名のメス犬でした。その女の園(?)と

も言つべきあばら屋に、毎日毎日、入れかわりたちかわり誰も来ない日は無い位、常に誰かが来ていたように記憶しています。圧倒的に男子生徒で女生徒は4、5人、それもさつぱりとした威勢のいい、およそ「女」を感じさせない(失礼!)方々ばかりでした。

それが6年間続きました。さすが大学生ともなると、ほんどの方が県外に行かれたものだから、随分間遠にはなりました。それでも帰省の度にお顔を出して、母を喜ばせて下さいました。それは社会人となられた後もずっと続き、大半の方が老眼・白髪頭になつてしまわれた今に至つております。

年令的にはうって付けの4歳年上の男性が、あんなにたくさん出入りしていたのに、なぜか我が身にロマンズはひとつとして芽生えませんでした。最近になって、やっとその理由が分かりました。昨年の夏、母が上京した折に「淳ちゃんも一緒に」と食事に招



平成9年 病気手術後自宅にて51回生と

いて頂いた時の事。Y君いわく、「あの頃、おれらあ野郎の目は全部、年若い美しき未亡人の方ばかりかし向いちゃったがよ。」「えー!ほんなら私と妹はおじゃま申すたが?」「あつたりまえよ、ガキは目

じゃなかったわえ」ですと。(この会話は、実のところもつと「人間味あふれる」と申しましようか、いや、いささか「生真い」とでも言った方が...。同窓会の会報には、あまりふさわしくない表現だったものですから、少々脚色してあります。)

この春、やっと土佐高から完全撤退。すんなり「ご隠居さん」に納まるかと思いきや、母の教師としての情熱はまだまだ失われてはいない、もつたないではないかと惜しんで下さる方々のご尽力で、明德義塾校に現場復帰致しました。

「今迄ガムシヤラに働いて来たんだから、あと残り少ない(?)人生、楽しく遊んで暮らしてもハチは当たらないよ。」と申しますと、「遊びは飽きるけど、仕事に飽きは来ない」「私は教える事が好き」「根っからの英語教師」「教師は天職」「生涯現役」...まあまあ好きなようにして下さい。

80歳になんなんとする今、上にはとくに遺言を過ぎた方々から、下は自分の孫よりも若い方達迄から、「先生」「先生」と言つて頂くのを見るにつけ、「教師冥利につきる」とはまさにこの事と、心の底からそう思います。私も何とか「普通のおおはさん」にさせようと、やっきになった時期もありましたが、ここ迄来たらもう応援するしかないという覚悟を決めました。あと何年続ける事が出来るか分かりませんが...

★出版★

- 41回生 黒鉄ヒロシ、中野孝次、如月小春共著 『犬は東に日は西に』 清流出版 1400円
- 40回生 塩田潮 『金神職地獄』 日本経済新聞社 1600円
- 29回生 竹内靖雄 『謎で解く日本人の行動学』 東洋経済新報社 1800円
- 34回生 田島征三、越水利江子作 『フレンド 空人の森へ』 教育画劇 1200円
- 34回生 田島征三 『いろいろあつてもあるきつづける』 光村教育図書 1600円
- 34回生 田島征三、三絵、木村裕一文 『オオカミのこぼれ』 偕成社 1400円
- 37回生 野田正彰 『奈乱のロシア』 小学館 1000円
- 37回生 野田正彰 『庭園に死す』 春秋社 3500円
- 55回生 森岡浩 『プロ野球人名事典1999』 日外アソシエーツ 2800円
- 24回生 大原健士郎監修 『精神科ハンドブック6心理検査』 星和書店 4000円 (49回生吉岡等さんも関わる)
- 24回生 大原健士郎 『学校の先生のための心の診察室』 講談社 1400円
- 24回生 大原健士郎 『眠れる生活 不眠症を退治するための生治術』 ごま書房 850円
- 24回生 大原健士郎 『心の病 その精神病理 あるがままの自分と仮面の自分』 講談社 680円
- 24回生 大原健士郎 『誰にも起きる「心の病気」の症例・110の答』 講談社 1600円
- 29回生 倉橋由美子 『毒薬としての文学』 (倉橋由美子エッセイ選) 講談社 1200円
- 51回生 坂東真砂子 『屍の声』 集英社 419円
- 51回生 坂東真砂子 『ラ・ヴィータ・イタリアーナ』 集英社 1200円
- 51回生 坂東真砂子 『身辺怪記』 角川書店 495円

# 上高地の雨

森健 (23 回生)

昨年の下尾瀬ハイイクの会に参加したのは、ちょうど会社生活にピリオドを打って新しい気持ちで再出発という時でした。それだけに、またとないリフレッシュの機会になりました。参加チームの皆さんの明るい元気にすっかり乗せられて、これからの挑戦に良い加速をつけることができました。同行した家内にとっても、とても印象深かったようです。

ことしは上高地ハイイクの会。家内は足の心配があつて



参加できませんでしたが、2人分の積もりで参加しました。新宿の待ち合わせ場所に行く、昨年のなつかしい顔がつぎつぎと現われました。もっとも、もっと早く行って皆とビールをぎゅっとやればもっと良かったのですが。

バスが走り出したと思ったら、あつという間に乗鞍高原畳平でした。小雨模様で、日の出を拝むことはできませんでした。しかし高いところにあがつていると、静かに明るく見えてくるまわりの高地と手前の草原をたのしめました。こちらがのんびりしている間に、乗鞍最高峰の剣が峰までちゃんとあがつて来た人がいます。さすが土佐高ですね。心配だったのはむしろ次の上高地です。まえに卒業まえの子供たちを連れていったときに、河童橋から見た穂高の美しい姿をまた見てみたいと思っていたからです。

着いてみると、まだ雨でしたが次第に止みそうな期待を持ってました。各自の自由行動ということでしたが、河童橋から明神池を訪れて、明神橋

を渡って梓川の対岸を帰ってくるハイキングの組に加わりました。雨に湿った緑の美しさ。梓川やその支流の水の清らかさところどころで見かけるかるがもの一家をたのしみました。期待の穂高もとき姿を見せてくれました。むしろ参加した皆さんと雨でしっとりとした上高地をゆっくり散策できたことは良かったと思います。

帰りは昨年と同様ににぎやかなバスツアーをたのしんで、定刻に帰って来ました。幹事の皆さんには、本当にお世話

になりました。ありがとうございました。考えてみますと、Tハイイクの会は37回38回を中心とした皆さんの富士山への感動の挑戦からはじまったのですよね。こんな企画をし、さつと実行する、これは素晴らしいことですね。そのチャレンジ精神、創造性こそは土佐高の精神です。それにまぶしくなるような美人の参加が多いことも良いですね。

21世紀の若手を引張って、明るい未来を築いてくれるのは、皆さんです。

21世紀の若手を引張って、明るい未来を築いてくれるのは、皆さんです。



皆さんの若々しい力を中心にして、これからもトレッキングの感動をたのしめるように、新しいコースへのチャレンジをお願いします。またまた参加してない方も積極的に参加して下さい。もちろんわれわれOBのなかのOBにも声をかけていただけると幸いです。誘っていただければ喜んでついて行って、コースによっては後に下がってゆっくりビールでも飲んでおくことにします。来年もぜひTハイイクの会をやして下さい。





イランの貧しい少年アリが修理に出した妹ザーラの運動靴を不注意から失くしてしまふ。親には言えない。明日から学校へ行けない、とすねるザーラ。さて・・・

これは、はじめて観たイラン映画「運動靴と赤い金魚」の話だ。

困った揚げ句、アリは、オレの運動靴を二人で交替に履けばいい、と云う。ザーラはしぶしぶカプカプの兄の運動靴を突っかけて午前授業に出る。急いで帰ると、今度は待ち構えるアリが、靴を履き替え、おくれまいと午後の授業に駆け出す。

親には内緒で急場を凌(しの)ぐ。これが幼い兄妹の精いっぱいの子工だが、その中には、貧しくてもこころ寄り添うらしい兄妹愛が見える。私はシーンごとに笑い、

笑いながら胸がジーンと熱くなつた。

そんな折、県内の学校別マラソン大会があり、三等賞で何と運動靴が貰える、と云うのだ。アリは勇んで参加する。ザーラの靴が貰える、必ず貰うゾ、と念じながらアリは三等をめぐし、ひたすら走るのだ。

ところが勢い込みすぎて一等になつてしまふ、一等では

# 泣き虫 怒り虫

十回生 立仙浩一

運動靴は貰えない。がっかりしてアリは家に帰り、庭に座りこみ、運動靴を脱ぐ。豆だらけの足指、底のぬけてしまつた運動靴。アリはそのボロボロの運動靴をじっと見ている。

そのシーンに私はハツとなつた。これは他人(ひと)事ではなかった。アリと同様、運動靴についての、貧しさ故のせつない思い出が私にもあつた。

私の中学では、毎月一回持物検査があり、その中に運動靴も入っていた。私の靴は二年も前のもので、伸び盛りの私の足には疾(はや)く履けなくなつて来た。無理して私立中学に入学(はい)つたものの、母ひとりの生計(かせぎ)では、月づきの月謝も遅れる有様だつたし、新しく運動靴を買つて、とはとても言えない。

検査の当日、私は小さくなつて履けない運動靴を隠すようにそつと並べた。回つてきた先生は、私の方をチラと見たが、黙つてその仮通(かりとほ)りすぎた私(わたし)はホツとしたが、同時に自分の貧(ひん)しさを見透(みとお)かされたような屈辱(くじく)を覚えてもいた。

## せつない運動靴

このイランの映画では、兄妹は最後には運動靴を買つて貰(もら)えるのだが、私の場合はそのあと新しい運動靴を履いた記憶がない。

運動靴一足、息子に買い与えられなかった母の無念を思うことはあつても、そのことで母を恨むことなどなく、今では却つて母との深い絆(絆)を感じている。

## 37回生同期会 幸徳正夫(37回生)

平成11年10月2日J.R五反田「ゆうほうと」において37回生の同期会が20名の参加を得て開かれた。「いやア一別以来です」と恰好をつけての挨拶もメツキの剥けるのは早い。そこは同期会、あつという間に思い出話や近況報告の花が咲く。卒業以来38年振り(振り)に再会したK氏は、不断の努力(努力)が天性の賜物(賜物)が体形はドン



ピシャリ高校時代のままでありケンタッキースタイルの貴(貴)禄(禄)諸(諸)氏の羨望(羨望)の眼差(眼差)を一身(一身)に浴(浴)びる。「あいや、今日はHのエツチ(H氏)が居らんねや」といつも同期会の中心にあつて賑(賑)やかなH氏の仕事(仕事)での欠席(欠席)を惜(惜)しむ声(声)しきり。H女史(女史)差(差)入れ(入れ)の土佐(土佐)鶴(鶴)の小瓶(小瓶)がパツパツと瞬間(瞬間)に空(空)になりメートルが上(上)る頃(頃)には医師(医師)のK氏(氏)を囲(囲)んでの俄(俄)か健康(健康)談(談)義(義)。血(血)圧(圧)、血(血)糖(糖)、中(中)性(性)脂肪(脂肪)に肝(肝)機能(機能)等(等)々の数(数)値(値)が各(各)氏(氏)より激(激)みなく発(発)せられお互(お互)いに一喜(一喜)一憂(一憂)す。生涯(生涯)現(現)役(役)たらんと願(願)う男性(男性)軍(軍)の健康(健康)談(談)議(議)は、学生(学生)時(時)代(代)の授(授)業(業)など比(比)べものならぬ真(真)剣(剣)さ。しかるに女性(女性)軍(軍)の若(若)やい(やい)でいること。「勿(勿)体(体)無(無)い(い)こと(こと)をした」との影(影)の声(声)も不(不)謹慎(謹慎)でもお世(世)辞(辞)でもない若(若)々(々)しさ。叶(叶)うものなら若(若)さを競(競)いたい男(男)ごころ。

いつものことながら宴(宴)酣(酣)の頃(頃)に、時間(時間)厳(厳)守(守)の声(声)がかかり、懐(懐)しくも温(温)かい2時(時)間(間)を共有(共有)した同期(同期)会(会)も、K氏(氏)が森(森)信(信)三(三)先生(先生)「教育(教育)者(者)・哲(哲)学(学)者(者)」の『人生(人生)の一生(一生)』を紹介(紹介)し、一同(一同)大きく頷(頷)きながら再(再)会(会)を約(約)しつつ散(散)会(会)す。  
職業(職業)に上下(上下)もなければ貴(貴)賤(賤)

# 土佐高校サッカー部全国大会へ!!

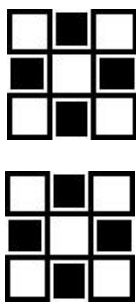
もない。世のため人のために役立つことなら、何をしようとする自由である。しかしどうせやるなら覚悟を決めて十年やる。すると二十からでも三十までにはひと仕事できるものである。それから十年本気でやる。すると四十までに頭をあげるものだが、それでいい気にならずにまた十年頑張ると、五十までには群をぬく。しかし五十の声をきいた時には、大抵のものが息をぬくが、それがいけない。「これからが仕上げだ」と、新しい気持ちでまた十年頑張る。すると六十ともなれば、もう相当に実を結ぶだろう。だが、月並の人間はこの辺で楽隠居したくなるが、それから十年頑張る。

すると、七十の祝は盛んにやってもらえるだろう。しかし、それからまた、十年頑張る。するとこのコースが一生で一番おもしろい。

**お悔やみ申し上げます**

15回生 森下 茂 さん

平成11年7月1日



「筆山」27号の原稿も集まり、編集、校正も終えた11月14日、母校よりインターネットに乗って思いがけない朗報が届いた。おかげで編集部は、速報記事の差し込み、紙面の組み替えて灰神楽の立つような大騒ぎとなった。

この日、母校サッカー部は、全国高校サッカー選手権への出場をかけた県大会決勝戦で、強敵追手前高校と対戦、何とこれを3・2で破り悲願の選手権出場を決めたのである。勿論、土佐高校サッカー部史上初の快挙である。

試合は前半17分に土佐が先制、24分に同点にされると、サイドの変わった後半12分に勝ち越し、さらに18分に追加点を挙げ、追手前の追撃を後半38分の1点だけに抑え、3・2で逃げ切り、『国立』へのキップを手にしたのである。

ひらめき光る

このチームは、高知新聞紙上で「ひらめき光る個性派集団」との賛辞を浴びていたが、ヒールパスやドリブルといった個人技を縦横に繰り出す、



すぐれたタレント集団と言えるようだ。ここにも母校の自由闊達な雰囲気と個性尊重の教育理念が息づいており、本大会での活躍が大いに期待される。

1回戦は12月31日  
仙台育英と

気になる1回戦の組み合わせだが、12月31日千葉県総合運動場陸上競技場の第2試合、14時10分から宮城県代表の仙台育英高校との対戦となった。暮れの慌しい時ではあるが、後輩諸君が持てる力を存分に發揮し、見事初戦突破を果たせるよう、多くの同窓の応援が待たれる。

また試合前日の30日午前9時30分からは、神宮外苑国立競技場において開会式が行われる。光り輝く後輩イレブンの晴れ姿は、こちらでもたっぷり見ることが出来る。

